総合討論

司　会：濱下　武志

濱下　これまでの報告、コメント、討論で、いくつかの基本的な論点が導き出された。これからの討論では、それに沿って進めていきたいと思う。その前に、これまでに行われた地域間比較研究では、どのような論点があったのか、高谷さんから簡単にお話をしていただくことにした。また、東南アジア地域についての論点は立本さんから、ネットワーク、移動という論点は家島さん、貿易、生業という論点は川勝さんからそれぞれご報告いただき、我々の共通認識としたい。それを踏まえた上で、総合討論を進めていきたいと思う。

中国と東南アジアを「一つにして論じる」枠組みを作るというのが、この地域間比較研究の大きなテーマであるが、既に主要な結論に向けての方向が何点か出てきた。一つは松原さんが出されたユーラシア大陸というもう一段上位の地域からの視点の問題で、それはモンゴルの存在から考えるべきだという指摘があった。また、宮嶌さんの出された中国と密接な関係にありながら、むしろ相対化させていく朝鮮からの視点、斯波さんが出された中国・華南と東南アジアを結びつける役割としての華僑というテーマも、地域間比較研究の大きな素材であろう。上田さんから出された中国の「輩分」というハイアラーキカルな縦の関係と、移動というホリゾンタルな問題は、違うディシプリンなのか、あるいは相互関係を持っているのか。議論を重ねていかなければならない。

「一つにして論じる」ということは、空間的な意味と、接近方法として意識化された中国と東南アジアの比較研究ということになるだろう。今まではヨーロッパの歴史文脈に照らし合わせて、東アジア、東南アジアを論じる枠組みが強かった。だが、中国世界からの文脈や、あるいは東南アジアの熱帯多雨林多島海ということから、海域の問題が一つにつなげる視野として、地域間比較研究のベースになってくるだろう。

過去2回の地域間研究会

高谷　この東南アジアをベースにした地域間比較研究は、既に2回行われている。最初は南アジアとの比較だった。南アジアにはインドという巨大な存在がある。そこには様々なエコロジーがあり、多様な文化があり、言語的にも様々な集団が見られる。それにも拘わらず、インドというのは何か統一されたものが意識される。おそらく「カースト」と「ヒンドゥーイズム」がインドの統一をもたらしているのだろう。

ヒンドゥーイズムという点から言えば、東南アジアも「インド化」として捉えられそうだが、実態は相当違っている。カーストとヒンドゥーイズムの両者が入っていなければ、本当の意味でのインド化ではない。インドは「インド化」されたインドであるが、なぜ東

南アジアはインド化されなかったのだろうか。そういうことが議論の焦点だったと記憶している。

カーストやヒンドゥーイズムは、インドのように住民が固定化しているような世界であるからこそ、実現できたのだろう。それに対して、東南アジアは熱帯多雨林多島海の世界であり、人々は常に動きまわる。そのような所ではインド化は起こりえないのだろうという結論が導き出されたと解釈している。

二度目は中東との比較だったが、そのときの議論で前面に出されたのは、やはり「イスラーム」だったが、シャープなイメージを描けるような結論は出せなかったように思う。それはやはり議論のキーワードである「ネットワーク」に対して、共通の認識ができていなかったことが原因だろう。それに関連して、中東側からは、イスラームの移動性対東南アジアの固定性、あるいは属人的対属地的という対比が打ち出されてきた。これは一昔前の東南アジアの捉え方に対する誤解も含まれるのだが、何よりも「ネットワーク」や、我々が主張する「生態に適した生業」あるいは「述語的論理」というものが、明確なディフィニションを持たないために、議論は混迷してしまったように思う。その時の反省を込めて、「ネットワーク」や「移動」という言葉に対して、共通認識を持つことから始めたいと思う。

いずれにしろ、二つの地域間比較研究から我々がイメージした東南アジアは、「熱帯多雨林多島海」という生態があり、その上に移動やネットワークで特徴付けられる社会があるというものだった。中国側から東南アジアを見る場合も、できればそれを意識して、議論を展開してもらえればありがたい。

この一連の地域間研究では、単に比較するだけではなく、最終的には世界から見た東南アジアという大きな特徴を出したいという希望がある。それは「熱帯多雨林多島海」「移動」「小人口」「ネットワーク」というものが打ち出せそうだという見通しで、今後も進めていこうと考えている。

濱下　地域のコアの部分で地域間比較をする場合と、リージョナルなレベルでの議論とインターリージョナルなレベルでの議論とで、地域を見るレイヤーは重層的になるだろう。ネットワークの議論は、むしろリージョナルやインターリージョナルな部分に作用するものであり、コアの部分を明らかにするにはふさわしくない手法だろう。

エコロジカル、アイデンティティー

立本　ネットワークはコアではなく周辺の比較に必要だとおっしゃったが、東南アジアでは、むしろそれをコアとして捉えたい。それが最終的な結論になると思う。

まず、地域間研究では比較の対象に対するパラレルタクソンの違いという問題がある。それは比較する地域単位と、比較の対象とな

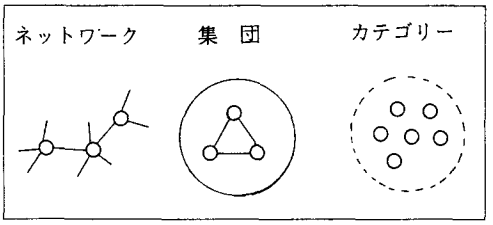
るものの二つについて言えることだ。

比較をしている内に、比較単位が出てくるというのが、プロセスとして考えやすいが、それにも拘わらず、中国、朝鮮、日本、タイという4つの国が、今回の比較単位としてまず出され、しかも親族関係というものに重点が置かれた。これが、上田さんが著書で示されたように、史的システムとして関連して地域を捉えていくという話であれば、我々も議論に乗りやすい。しかし親族関係の比較は、単にその違いを述べるだけの議論に陥る可能性が強い。その意味では上田さんの動詞的、形容詞的、名詞的という切り口は非常に斬新だが、宮嶌さんの指摘の通り、文法は文化によってそれぞれで違ってくる。その点では、もう一歩議論を進める必要を感じる。

東南アジアが実はバラバラな世界だということは、我々は十分に認識している。それにも拘わらず、研究者として、あるいは生態区分として、東南アジアを一つにまとめて議論を展開している。そこを汲んでもらって、逆に中国は解体してもらわなければならない。松原さんが言われたように、元々中国というものはなく、そこにできたのはシステムや制度化であり、統治イデオロギーや幻想が歴史の中で再生産され続けている。現在でも中国や華僑は、その大きな影を引きずっている。このような発想で見たとき、中国の本質とは何かという議論にまで踏み込んでもらえれば、東南アジア側としては非常に有り難い。

そこがいつも東南アジアを一つの地域単位として見るときに、我々が苦労している点なのだ。一つ一つの現象形態を比較したとき、何に関してもすぐに反証が出てくる。それを避けるために、どうしても還元主義になって、本質とは何かというところに議論が還元していく。しかし、東南アジアとは本質把握でしか捉えられない。そこを理解してもらえないことが非常に多かった。今回は、そういうレベルで捉えられる中国を出してほしい。

もう一度「ネットワーク」という言葉について説明しておこうと思う。この言葉が混乱を招くのは、「集団」や「カテゴリー」というものと、概念的に区別できていないことが原因だと思う。下図を見ていただきたい。



ネットワークというのは、元々「ダイアッド(二者関係)」と言っていたものだが、決して二者関係で終わるものではなく、そのコネクションだと考えてほしい。社会を考える上での非常にポーレミックな言葉として使われている。上田さんの言葉を使えば、そのつながりの根底には形容詞も名詞もない、動詞的な世界がある。

カテゴリーというのは、例えばジェンダーで、男というカテゴリー、女というカテゴリーというように、中の構成員に何等つながりはなくてもいい。その枠の中で一括できるようなものだ。

日本語の用法としてよく間違われているのは、ネットワーク組織体というものだ。これは実は「集団」として捉えなければいけない。メンバーシップも役割分担もはっきりしていて、その中でのつながりがある。我々はネットワークと集団を区別しなければならない。家族圏や宗族の問題も、同じ集団としての議論になっていた。だが、全く質の異なる社会関係は、集団概念では捉えられない。だから、我々は集団をネットワークと区別したい。東南アジアの家族は、先程の動詞的なネットワークで捉えなければならない。集団として捉えたものとは、比較対象にはならないのだ。

その上で、集団にしろ、ネットワークにしろ、その内部にはヒエラルキーの側面とヘテラルキーの側面がある。ヘテラルキーにもレベルがあるが、そのレベル間での相互作用があり、そしてそのレベルごとにまたループがあるというデモクラシーに近いものとも言えるだろう。

東南アジアの社会には、ヒエラルキーな側面や統治イデオロギーのようなものは薄い。そのような社会を捉えるために「ネットワーク」という言葉を使っている。

社会学者が言う家族の比較でも、家族集団からのアプローチで家族関係を語っていることが多い。だが、そこで使われる集団概念はあくまでも、統治イデオロギーやシステムが含まれたものだということを認識する必要がある。そのようなイデオロギー、システムの稀薄なところでは、やはり我々の言うネットワークからのアプローチで捉えなければならない。これが東南アジアからの発想である。

このような社会関係の本質の違うところで、人の移動が行われている。東南アジアでも中国でも移動しているが、違うコミュニティに参入した後の対応の仕方は全く違ってくる。華僑は常に同郷、同業という枠組みを持ってくる。ところが東南アジアの人の動きは、あくまでも裸一貫で来て、そのコミュニティの中でポジションを得て認められていく。そういうネットワーキングが可能な世界である。

これは入っていくコミュニタス(コミュニティの質)の違いによるのだと考えている。それは、コミュニティの歴史が浅い、あるいは参入が容易であるとか、フロンティアがあるというような色々な現象形態と結びついている。その程度の問題だと思う。

コミュニティというと、先程の集団、カテゴリーの問題で反論が出るかもわからない。ネットワーク、集団、カテゴリーと三つに分けて論じたが、「この三者が明確に分かれていて、集団やカテゴリーは東南アジアには無いのだ」という議論をしているのではない。本質として「東南アジアの集団を見れば、

ネットワーク的である」という話だ。どんな議論にも必ず反証は出てくるが、どの点が原理として貫徹するのか、あるいは非常に強く出ているか、それが説明原理となるのかということが、我々の論点だと思う。

参入する人の文化的な違いと、コミュニティの質自体が違う。これが私の「移動」に対するコメントの一つだ。それを支えるのが熱帯多雨林という生態的な基盤である。このような理論付けをして、次に問題になるのが、「範囲」という比較の対象単位である。

東南アジアというのは最初に一つにくくったが、それでいいのか。あるいは海域世界と言ったときに、濱下さんが書いておられるように、オーシャンよりも小さく、ベイよりも大きい海域のチェーンとすると、際限なくつながっていきそうになる。そうではなくて、熱帯多雨林と海というエコロジーを中心とする一つの単位があると措定した方が、東南アジア理解が容易になるだろう。範囲はそれぞれの人のイメージで変わるかもしれないが、コアとしては熱帯多雨林と海というエコロジーの上に、移動の問題や社会関係の本質がある。その意味で、エコロジカル・アイデンティティを東南アジアのアイデンティティとして出してみた。

濱下　エコロジカル・アイデンティティは、同郷というものとは違う。

立本　エコロジカルには二つパースペクティブがある。もちろん植物を見れば土地だが、動物を見ればもっと広い範囲で動く。これは「関係」と捉えてほしい。その循環の中でのポジションを得ていくアイデンティティのあり方もあると思う。

濱下　見知らぬ土地で定着できる条件は、どのように考えられるだろうか。

立本　フロンティアや小人口世界のようなものが大きく働いていると思う。フロンティアがあってどこにでも行ける。受け入れる側のコミュニティも、東南アジアでは非常によく動き、歴史も浅い。中には、ジャワのように歴史が深く、コミュニティも固定するようなところもあるが、東南アジア全般で見れば、参入の容易な世界だと言えるだろう。歴史が浅く、フロンティアがあり、そのようなことがネットワーキングを可能にする。ブギス人でも地縁、血縁という関係を使うが、それにこだわり、それだけでいくようなことはない。何でもあるものを使っていく。これはある面では中国人にも言えることかもしれないが。

濱下　理論モデルの抽象性としては、他の地域にも当てはめることができる。このあたりは東南アジア研究の懐の大きさを感じる。

私は中国社会もネットワーク社会だと思っている。その意味では、今のネットワーク論は非常に臨時的で、参入の後では「集団」へと移行するものだと思う。

立本　そういうこともありうるが、移行した後もネットワーク的な原理で動く。

濱下　上田さんの言う流れる砂と砂の関係を

ネットワークで議論できないか。それは斯波さんの均分相続とも関係する。家族構成員は、生まれ落ちたときからアセットを持っていると言える。自分の相続分を投資や売買に利用できるという形で、それをやりとりすることでネットワークができる。ネットワークの前提に、そういう均質の持ち分(株)がある。そのようにしてネットワークができると考えられないだろうか。

立本　東南アジアには、そういう株や均分という制度、システムは入っていない。制度があるからという説明で東南アジアを切られては困る。中国側がネットワークを語るときは、宗族のような制度が必ず入ってくる。東南アジアには、それが希薄なのだ。

濱下　だが、宗族はネットワークの一つの呼び方だ。私はネットワークを宗族と呼ぶ場合もあるし、同郷、あるいは同業で呼ぶ場合もある。つまり人が株という共通のものを持っていれば、その表れ方が家族関係であれば、宗族と呼んでいい。一個人は宗族にも、同郷にも、同業にも属し、投資の対象が違うだけの問題で、その株をどう使うかという面からネットワークを理念的に捉えたいと思う。

それぞれの地域から、経験的な蓄積が発現する論理というものがある。だからこれは、「有る、無い」とは言えない問題だと思う。ある意味では、研究がモデルビルディングというより経験的であるということに起因するのかもしれない。この問題も研究のスタイルの違いという比較研究となると思う。今までの東アジア研究は、中国＝コア、そしてその膨張という形であったが、人類学、社会学を吸収することで、上田さんの議論のような新しい局面が出されてきている。そういう研究上の局面の違いがある。その意味では、中東研究は生成発展する研究状況で、非常に求心力が強く、東南アジア研究は日々新しいと思う。

討論になってしまったが、続けて家島さんからネットワークと移動についてお話しいただきたい。

ネットワークと移動

家島彦一　松原さんから、ユーラシア全体を視野に入れたそれぞれの地域の相対的な関連という話題が出たが、その考えには非常に共鳴する部分がある。私の考えているネットワークは、ユーラシアとアフリカを含めた、全体を覆うネットワーク、つまり、上位レベルのネットワークを想定している。

斯波さんから華僑ネットワークについての議論があり、これに対して立本さんは「それはネットワークではなく集団の問題である」と反論されたように、様々な研究者の目的と分野によって、ネットワークというキー・コンセプトが多様に使われていることがわかっている。宗族という問題や情報についてもネットワークという言葉が使われている。イスラームの都市研究では、都市内の人間・社

会の諸関係をネットワークで分析する社会ネットワークという考え方もあり、最近、非常によく使われている言葉である。

ネットワークという言葉の魅力は、そのアナロジーから様々な連続の機能と関係性が捉えられることにある。つまり、「繋がり」そのものに注目し、繋がりの構造となる結節点(中心、中間拠点、末端)、繋がりの方向性、強度、広がりの範囲、波及と連続の度合い、結び付きの手段と方法、結び付ける担い手、そこに流れるヒト・モノ・情報など、それらの誕生・発展・競争・吸収・分岐・消滅・相互接続などのダイナミックな展開の中に歴史性を読み取るということになる。つまり、ここでのネットワークは広域的地域間に成立する交易(交通)ネットワークのことである。

国際間には様々なレベルの交易ネットワークがあるが、私は広域的地域間に見られる自然生態系の差異によって生じる非常に上位レベルの国際間ネットワークを考えてみたい。そのネットワークに寄生して、地域間、地域内を繋ぐ様々な下部ネットワークが成立する。例えば、国家というのもその国際間ネットワークの一部に寄生して成立するものだと考えられる。

交易ネットワーク、あるいは商業ネットワークといった場合の「交易」、「商業」は、非常に広い意味で捉えている。つまり、ヒトの移動、モノの流れ、それを動かす担い手、交通手段、自然条件、技術、情報、そういうものを総合的に含んでいる。「ヒト、モノ、情報の交流を支える構造」としてのネットワークである。

地域と地域の間に、なぜ交易ネットワークが生まれ、持続するのか。やはり、そこには交易ニーズがあるからであろう。広い意味でそれを捉えれば、文化の違い、人の違い、自然生態系の違いとそこから生じる様々なニーズの違い、あるいは異質性や格差があって、それを平準化する運動としてネットワークが生成すると、捉えることができる。

もう一つの重要な点は、ネットワークは繋がりを持つが故に、双方向的な流れを示すことだ。AとBを平準化し、BをAに流し、AをまたBに流す。そういう相互性・双方向性・任意性や相互補完的な関係を、私は特に重視したい。これに類似する考え方として、フィリップ・カーティンの理論がある。都市と都市の間にネットワークが成立し、商人が都市の中に貿易のコミュニティを形成していく。それは都市間にある格差を利用し、そこに拠点を形成することで、ネットワークが生成される。そこでクロスカルチュラルな関係が生まれ、平準化が進んでいく。すると次第に交易ニーズは減少し、そこでの関係は消滅することになる。そうなるとまた別のディアスポラを作っていく。つまり、平準化とは、通文化、平準化の運動であり、ネットワーク論に非常に近いものと考えられる。

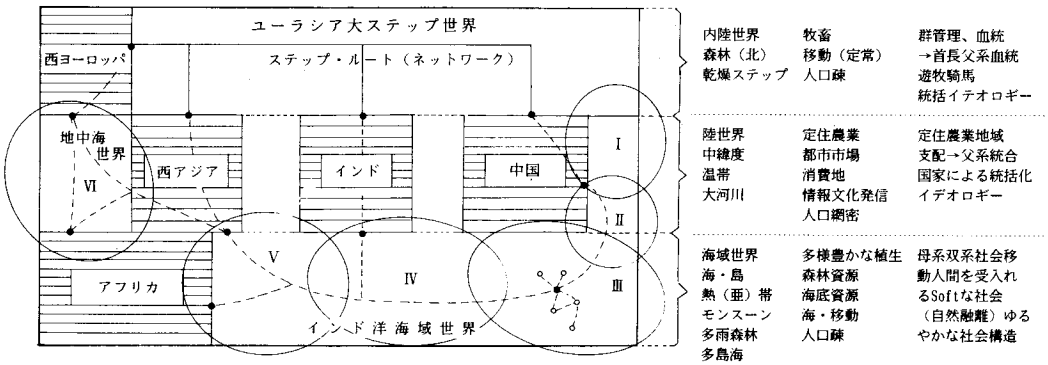
もちろん、ユーラシアやアフリカには、無

数の交易ネットワークが様々なレベルで存在している。しかし、それらの中に、ユーラシア・アフリカの全体を貫き、循環するような巨大な国際交易ネットワークが存在するのではないか。これは時代によって、生成と機能、あるいは影響力、関わり方、ネットワークの意味などは変わってくるだろうが、長期にわたって歴史的に形成されつつ広がり、繋がっていくものだろう。

このような国際交流ネットワークの世界を以下のように、図式化して考えてみた。北にはユーラシアの大ステップ地帯を繋ぐネットワークとして、遊牧の世界がある。そして中緯度には中国、インド、西アジアという、コアになるような文明の中心が常に生成・展開している。南には東シナ海から南シナ海、インド洋、そして地中海にかけて、海の世界が広がっている。以上の北の大ステップの世界、中緯度文明圏、南の海域世界という三つの異なる世界を繋ぎ循環する大交易ネットワークが、歴史的に生成、展開し、それによってそれぞれの地域的な様々なレベルでのネットワークが形成・発展・交流・消滅・再生の運動を続けていたと考えられる。

では、交易ネットワークの具体的な生成要因とは何だろう。国際間の大交易ネットワークが生まれてくる原因の第一は、ユーラシア、アフリカにまたがる自然生態系の諸条件が考えられるだろう。つまり、生産性・量・質・種類の違い、植生の違いなどがある。それと同時にインド洋海域世界を考える上で、モンスーンという要因は特に重要であろう。モンスーンは特殊な自然生態系を創ると同時に交通上の便利性を提供する。第二は、人間の移動のダイナミズムである。人間は様々な様態の中で移動する。同時に、移動とは共同体的な結合関係を再生させ、再編する運動でもある。そして、様々な地域間ネットワーク関係を作り出していくのだ。

中緯度圏には、中国、インド、西アジアという大文明の世界、固い陸の領域国家の世界があり、古くから大文明を外の世界に拡散し



〔Ⅰ〕東シナ海〔Ⅱ〕南シナ海〔Ⅲ〕東南アジア海域世界〔Ⅳ〕ベンガル湾〔Ⅴ〕アラビア海・インド洋西海域

ている。そして非常に多くの人口を集めた都市が発達し、周縁部の人々にとって周縁には多様な地方文化(小文明)が存在し、中緯度圏の大文明との間に文化的ネットワークが生まれてくる。これが第三の条件(生成原因)である。

先程紹介したように、ネットワークは「差異」を求める運動であり、ネットワークが生まれても、平準化されてしまえば、やがて関係性は消滅する運命にある。そこで、他の機能やシステムを探さなければ、そのネットワークの再生はできない。だが幸いなことに、ユーラシア・アフリカというのは南北に帯状の自然地理環境の大きな差異がある。従って、常に異質性から平準化、そして、異質性を循環する運動を繰り返している。そこに巨大なユーラシア・アフリカを繋ぐネットワークが歴史的接続性を持って展開する基盤があった。

異質性をさらに細かく、相互的に考えてみよう。旧世界を考えてみると、北方のユーラシア・ステップ地域は、その北に森林・ツンドラ地帯があり、東に興安嶺山脈、西にウラル山脈が連なる。その中間には帯状に大草原地帯が広がり、そこを生活・移動の舞台としているのがモンゴル系、トルコ系などの遊牧系牧畜民である。それは東南アジアと同じように小人口の世界である。家畜群を管理することからも統御と管理能力が問われ、あるいは血統を重視するという面から、常に強い集団のリーダーシップが求められている。

中緯度圏には、中国、インド、西アジアという大文明圏が陸世界を中心として存在している。そこは温帯湿潤または乾燥圏であり、大河川があり、人口は稠密である。そこでの生業は基本的には定住型農耕であるが、同時にネットワークの拠点としての都市が発達し、市場があり、大消費地でもある。常に新しい文明のシステムを作り出し、その周縁地域に発散させるエネルギーを持ち、同等に求心力を持つ。その文明と経済力が魅力となり、周縁から中心への吸引力となっている。中国の朝貢システムが非常に長期に亘たって継続していたのも、中国の持つ強力な生産性という経済的魅力に、周縁地域が引き付けられ、それが儀礼化したものと捉えられるだろう。

ユーラシア大陸の東と南を縁どる海の世界は、東シナ海から東南アジアへと至る東の海域世界と西のインド洋海域世界であり、後者は地中海まで繋がる一つの大海域世界である。そこは海と島の世界である。

基本的にこの海域世界の多くは熱帯と亜熱帯の世界であり、その上、インド洋では、モンスーンが年間の60%以上卓越する。そのことが生業や、生活形態、思考形式まで大きく規定していく。そして何よりも重要なのが、モンスーンによる船の交通を生んだということだ。船は大量のヒト・モノ・情報をダイレクトに、広範囲に、安全・確実に輸送する。

さらに、熱帯多雨林の地帯には非常に豊かで多様な植生があり、生産性がある。中緯度

圏の文明が発達すればするほど、熱帯の、特に東南アジアの熱帯森林資源の魅力に引かれ、交易ネットワークが強化されていく。

19世紀以前の海域世界は小人口の世界で、フロンティアが大きく広がっていた。そこには外の人間をソフトに受け入れる空間があった。同時に母系、または双系の社会であり、移動してくる外の人間をソフトに受け入れ、そしてまた送り出すこともできる。そこは、大森林や河川によって、緩やかな地域的隔離性を持つ。このような自然条件の下では、そこに生まれた社会構造や国家構造も緩やかなものになる。

ネットワークの拠点としての港は、様々な多重多層の人間を受け入れる。そこはコスモポリタンな交易空間として機能し、外との関わりによってのみ成立する。港は河川を通じて内陸世界とも様々な関わりも持っており、同時に海を通じて国際交易ネットワークと関わりを持っている。港は陸と海との接点にあり、国際間の情報を利用して集まる様々な人間が活躍する交易ネットワークの結節点であった。

濱下　ネットワークを正面から捉え、非常に広いカバレッジを示されたと思う。ネットワークの密度の違いや、関わりの違いというお話でもあったと思うが、それらは他の呼び方もできるのではないか。

80年代に、ギャリー・ハミルトンは華人ネットワークを強調し、中国の大陸が改革開放する前に華僑ネットワークができたのだと論じている。彼は儒教文化圏、儒教経済圏的なものから議論してきたが、現在では大陸本体が変化し、東アジア経済、華南経済、東南アジア経済を華人ネットワーク論のみでは議論できなくなってきた。華人資本自体もマルチナショナル化している。

私はネットワークの問題を市場と組織の間に位置づけ直そうと考えている。ネットワークは、市場に対しては非常にプロテクティブな面を見せる。自分たちの利益を守るという形で、利己的であり、やや閉鎖的なものとして働く。組織との関係は、場合によっては取引相手を変えていったりと、ある意味で非常にフレキシブルである。今まではネットワークで結ばれるが故に強いという側面が強調されてきたが、市場と組織的な問題との中間にネットワークをおいたときに、フレキシビリティと同時に、一方では非常にプロテクティブな面が出てくる。経済史では、そういう問題が出てきている。

家島　同じリングをめぐって競合関係が当然出てくる。そこに様々なネットワークの相違が出てくる。それはまたネットワークのクライテリヤの問題として議論しなければならないだろう。

濱下　立本さんのネットワーク論と、家島さんのネットワーク論が、どのようにクロスしていくのかも興味深い。続けて川勝さんに、貿易、生業という問題を話していただき、総

合討論へとつなげていきたい。

陸の世界を作り出す海の世界

川勝平太　我々は地域研究の総合的手法を確立する仕事に従事している。地域研究が個人レベルの行動様式に還元できるのであれば、わざわざ地域レベルでの研究手法を模索する必要はない。個人はそれぞれが帰属している地域社会から規制を受けている。そこに地域社会の自立性を認めることができる。

地域社会を確認するのに、立本さんの言われたエコロジカル・アイデンティティは、主体と環境との総体的関係を捉えるものとして注目したい。環境は人間と区別されがちだが、エコロジカル・アイデンティティは環境を人間のアイデンティティの一部とみなすべきことを示唆している。大事なことはそれが可変的なことだ。地域とは、単なるフィジカルな世界ではなく、フィジカルな世界の中に人間主体を含むので可変的である。故にそれをシチュエーションとして捉えるべきだという立本さんの立論は魅力的だ。

では、それを経済史家としての私の立場で、どう受けとめればいいのか。ある地域社会で使われる加工道具、消費財などを含め、全ての物産の総体を「物産複合」という観点で捉えてみればどうか。物は生活を営むためには不可欠だ。物産複合は、その社会に生まれてくる人間にとって環境である。環境としての物産複合を媒介にして人間は行動するから、それは人間主体から離れて存在していない。人間行動の総体を「文化複合」と呼べば、地域のシチュエーションは文化・物産複合(culture complex of products)として捉えられる。重要なことは物産複合が分かれば、人間の行動様式の「文化複合」が分かるということだ。物産複合が変われば、人間の行動様式は変わる。そのようなものとして文化・物産複合はシチュエーショナルなものだ。

梅棹忠夫さんの有名な「文明の生態史観」では、世界を、西ヨーロッパ・日本の近代化した第一地域と、それ以外の第二地域に分けられた。では、東南アジアはそのどちらに入るのか。梅棹さんは、東南アジア地域は、封建制も資本主義もないから、第一地域ではないと明言し、インドの影響を受けているがインドではなく、中国の影響を受けているが中国ではないモザイク的世界だという位置付けられていた。現在の東南アジアは資本主義の波に乗りつつある。今なら、梅棹さんはどう位置づけられるのだろうか。

今回、家島さんの示された図では、海域世界と陸地世界が面積の上では対等に描かれている。梅棹さんの文明地図を構成するのが乾燥地帯と農業地域であり、いわば陸地一本槍であったのと違って、画期的だと思う。東南アジアが海域世界であることは疑いない。しかしそれが「西太平洋海域世界」かと言えばこれはＡＰＥＣ(アジア・太平洋経済会議)以降に出てきた概念で、高谷さんの言われる

同一の世界観を共有している「世界単位」とは言えないだろう。

「東南アジア」という地域概念の歴史は浅い。欧米ではここ四半世紀、日本でも20世紀に入ってから生まれたもので、それまでは「東南アジア」というコンセプト自体がなかった。東南アジアはアイデンティティの形成途上にあるというのが実情だろう。高谷さんは東南アジアを海域世界、ジャワの火山の世界、大陸部山岳地帯、大陸部デルタ地帯の四つに分けているが、他の世界単位との比較と連関をさぐるには、海から語るのが適切だと思う。

東南アジアを海から捉えると、世界は大きく二つに分けられる。まず、東南アジア、東シナ海、南シナ海からなる海域世界がその一つだ。それぞれが独自の海域でありながら、これから説明するように、三者の関係がダイナミックな独自の一つの世界を作り上げている。もう一つは、東南アジア、インド洋、地中海、大西洋からなる海域世界であり、こちらも一つ一つの海域は独自であるが、四者の関係がダイナミックな一つの世界を作り上げている。東南アジアは、それら二つの世界のダイナミズムにともに関わっている。

まず前者だが、東南アジアとは中国はシナ海で結ばれている。その結ばれ方を大きく変化させる少なくとも二回の大波があった。第一の波は東南アジアに源を持ち、第二の波は東南アジアを襲った波だ。波を浴びれば、物産複合が変わり、人間の行動様式が変わり、エコロジカル・アイデンティティが変容する。

東南アジアに源を持つ第一の波は、二つの方向に働いた。一つは、東南アジアから南シナ海を経て中国の江南に至るもので、中国に運ばれた物産が、江南で結合されて江南セット(文化・物産複合)となって、それが東シナ海を伝わって朝鮮・日本に及んだ。東南アジアには大勢の中国人が運び屋として乗り込んだ。東南アジアはこの第一の波で中国人の急増をみて社会不安をかもした。それはバタビアやマニラでの中国人大虐殺という事件に現れている。だが、このときの中国人の進出は東南アジアにとっては危機ではない。東南アジアは、第一の波では、与える側だ。

波に対する最初のレスポンスは11、12世紀の江南地域で、東南アジアからもたらされた物産を江南地域が自給する形の生産革命を起こした。この生産革命は江南から次第に中国全体に広がり、南宋から元を経て明代までずっと続いた。たとえば、江南から東アジアに青色の生活文化が生まれた。中国産の青花(陶磁器)と木綿の誕生だ。それまでの中国の食器は青磁を使っていたが、青磁は緑色である。それが青に変わる。食器にコバルトブルーが使われたのだ。衣服においても、木綿と藍が入り、大衆衣料を青色の木綿に変えた。衣食に使用する物や、色が変われば、価値観も変わる。

このような江南セットは中国各地、また東

シナ海を渡って朝鮮、日本へ伝播した。この波は、東南アジア——海洋中国——東シナ海と伝播したが、その波を最後にもろに被ったのは日本だ。中国は、華中・華南の海洋中国と、北京を中心とした大陸中国とは、対等の力を持ち、セットとして中国を形成しているが、日本は、海洋中国から外圧を被り、大陸中国をモデルにした国家を作り上げた。鎖国のモデルは大陸中国だ。中国のイデオロギーが朝鮮や日本で制度化されるのも、この動きと無縁ではない。朝鮮は江南セットを受容して16世紀に大開発時代を迎え、土地と結びついた社会を形成した。朝鮮は元々中国のように均分相続だったが、人口が増えて土地が足りなくなって長子相続が顕著になり、18世紀には長子優先の儒教社会が成立した。

第一の波のもう一つの方向は西方だ。当時、環インド洋圏にはイスラームが広がっていた。東アフリカ、西アジア、ムガール帝国のインド、そして東南アジア世界に広がっていたイスラーム世界だ。東南アジアからこのイスラーム世界を媒介にして物が西方に運ばれ、それらをヨーロッパが受け取った。それらの物産はやがてヨーロッパ人自身が持ち帰り、大西洋の彼方の新大陸に移植され、環大西洋地域で自給する大西洋経済圏を形成した。ヨーロッパが環インド洋経済圏に依存しなくても済むようになったのは1800年頃だ。それは日本における自給自足体制の完成と時を同じくしている。

要するに、第一の波は、東南アジア地域に起源を持ち、一つは、江南セットとして物産複合を整えて、中国や朝鮮、日本へと北に流れる波となり、鎖国を成立させ、もう一つは、インド洋を経てヨーロッパへと流れ大西洋経済圏を成立させた。第一の波の起こった近世は、東南アジアは豊饒の海として存在し、与える側にあった。

第二の波は、19世紀後半から今日に至るまで続いており、第一の波の流れが逆流したものだ。ヨーロッパは大西洋経済圏で、それまで環インド洋圏からもたらされていた物産を自給し、その後、今度は大西洋経済圏で作った物産を東方へ逆流させた。その逆流波が襲った東南アジアは植民地になった。一方、中国からも大量に東南アジアに人々が流れ込んだ。その背景として18世紀に中国の人口が３倍に急増し、内陸北部へ人が移動するとともに、南の海の世界へも吐き出されていったという歴史がある。その流れが大々的になったのが、19世紀後半以後の苦力である。こうして東南アジアには、かつて第一の波の流れていった西からと北から二つの大波が反転し逆流してきて翻弄された。

ここで留意しなければならないのは、東南アジア、東シナ海、南シナ海から成る世界は互いに共通する独自の物産を持ち、一方、地中海世界からインド洋、東南アジア海域にかけての世界もまた互いに共通する独自の物産を持つということだ。両者の物産複合は区別

でき、両者は異なるエコロジカル・アイデンティティを持っていた。西洋からの第二の波の影響は東南アジアが最も強烈に被ったが、そこどまりで、東アジアにまでは及ばなかった。それは東アジアの物産複合とヨーロッパの物産複合とは直接競合する関係になったからだ。日本の工業化を可能にしたのは東アジアの物産複合の内部における競争に勝ったからだ。

戦後になり、日本の工業化を、台湾、韓国、香港、シンガポールが追い、ＡＳＥＡＮへと広がった。これは環シナ海域における第二の大きな生産革命の伝播だ。これは日本を起点にしており、海洋中国人が第二の生産革命をにないながら、中国の周辺海域に波及している。この環シナ海域世界で、東南アジアのアイデンティティが問われ、同時に中国人のアイデンティティも問われている。それは東南アジアが中国人のアイデンティティを映す鏡となっているからだろう。

第一の波、すなわち海洋中国の外圧に対して、朝鮮や日本がレスポンスする中から自国のアイデンティティを確立したのと同じように、海洋中国の外圧を受けて、現在、東南アジア地域は自国アイデンティティを確立しつつある。

海域から世界を見ることによって、これまでの陸地的な世界観は相対化される。海域世界は東南アジアを結び目として、二つの大きな海域世界に分けられ、東南アジアは、両方の結び目に位置しており、様々な海域世界の本質を映し出す鏡としての性格を持っていると思う。以上のように考えれば、高谷モデルにおける４つの類型、あるいは梅棹モデルにおけるモザイクという考え方を積極的に発展させる道になるように思う。

濱下　波という考え方で、東南アジアが形成され、かつ他に影響を与える。いわば東南アジアが本質を映す鏡だという基本的なアイデアは、東南アジア像の本質を的確に捉えるものだろう。波という考えから、海によって東南アジアが位置付けられるという指摘だった。松原さんからモンゴルの影響というお話もあったが、その13世紀の南下が当時のシュリーヴィジャヤや東南アジアの構造を基本的には決めたのではないかという議論もある。東南アジアが多地域間関係の結び目と考えられるだろう。決してインドと中国の谷間の地域というだけではなく、他に対して積極的に触手を伸ばすような所だという印象を受けた。

先程の家島さんの分類だが、南シナ海と東南アジア海域世界を区別してという場合、南沙諸島あたりまでが南シナ海の範囲になっているが、私の認識では南シナ海はもっと範囲が広いように感じていたのだが。

家島　私が最初に考えていたものは、南シナ海とベンガル湾の二つの海域世界を非常に広くとって両海域世界をだぶらせたので、東南アジア海域という特別の設定はなかった。確かに13,14世紀の段階までは、『諸蕃志』の記

録でも見られるように、南シナ海から伸びたネットワークが東南アジア海域を大きく含み込む形でジャワの多島海に入り込み、スールー海やセレベス海にまで入っている感じがする。つまり、南シナ海の海域世界に東南アジアは組込まれていた、と思われる。

だが、最近、私は15世紀以降の東南アジアの海域は非常に大きな一つの海域世界として独自に設定する必要があると認識し始めた。確かに、その方が理解し易い。ただ、指摘されたように、その場合、南シナ海の海域世界と東南アジアの海域世界との境界が非常に曖昧になってくる。ベトナムのトンキン湾あたりで北と南に伸びていく二つのネットワークが相互にオーバーラップしてくるのではないかと思う。したがって、インドシナ半島のチャンパやビサーヤのようなイスラーム世界と深く関わる国際港が出現し、そこに両海域世界の接点が存在していると考えられるだろう。海域の接点に重要な交易港が生まれるのが原則だからである。それは、域内ネットワークの拠点であり、同時に域外の国際間ネットワークの拠点でもあり、両者の役割を担っている。

生活の場としての東南アジアの海

高谷　東南アジアからも一言いわせて頂きたい。船の形から説明すれば、インド洋海域からはダウ船がスマトラまで来ている。南シナ海からはジャンク船が南下してくる。この二つが東南アジア海域で出会って東西の交易の幹線航路を成している。だが、それとは別に、我々多島海にはアウトリッガーによる生活の場がある。ブギスが乗っているような船が、生活の場として動いている。確かに交易ネットワークというものが大きく存在はしているが、ここはやはり生活の場として考えてはもらえないだろうか。

生活の場である限り、人が何を考え、どのような生活をしているのかという視点から考えたい。だが、どのような社会かということから考えると、立本さんの主張するネットワーク論になってしまう。やはり、社会を作る原理としてのネットワークが重要だ。このような交易ルートを見た場合とは違う方向でありながら、ネットワークという同じ言葉が出てくる。そこを整備してもらえば、東南アジアがもう少し鮮明に出てくると思う。

生活の場としての海というのは、他にも見られるかもしれない。しかし、もっとも典型的に見られるのが、東南アジアの多島海にある。生活者を重視するネットワークと、交易を重視したネットワークとのズレを整理しながら議論すれば、東南アジア像もより明確になるのではないか。

坪内　東南アジア側から見ると、議論を海に絞ってしまうと、曖昧さが残ってしまう。確かに東南アジアは、海の世界であり、人もいないような世界だが、その陸地面積は意外に広い。全域を全て合わせると、インドと同じ

ぐらい、あるいは中国にも匹敵するような広さがある。島嶼部だけをとれば、その半分ぐらいになるのだが、それにも拘わらず相当の陸地面積がある。これは他の海域には見られない。それが生活世界を生み出す要因になるとも言えるだろう。

また、ユーラシアのステップ地帯と東南アジア、その双方がともに小人口で捉えられているが、その構造自体は基本的には異なっていることも併せて考えておかねばならない。ユーラシアの場合は、土地生産性が低く、生活に要する面積、生活圏自体を非常に広く設定しなければならない。だが東南アジアでは、わずかな土地でも生活できるという条件がありながら、小人口の世界である。そのような設定を最初に認識しておかなければ、同じ小人口として捉えてしまうと、誤解が生じてくると思う。

家島　地域は外の世界との関わりなく存在するというような「完結・自立のもの」ではなく、常に外に向かって開かれたもの、外との関係性と比較の中で捉えられるというのが私の研究上の立場で、この点では高谷さんと別の論理なのだろうか。

地域と地域との間には様々な「差異」がある。その差異をそれぞれの地域の持つ地域性として捉えるならば、その地域性を最大限に生かすことで地域間の交流関係が生まれる。交易は、地域間の差異に根ざしたものであるからだ。したがって、地域性は創られるものである。

山田　家島さんの海域図は、基本図として非常にいいできだと思う。ただ、東南アジア側からすれば、多少不満の残るところもある。もう少し重みづけができないだろうか。

アフリカと東南アジアの森林を比べると、東南アジアの方が圧倒的に資源量が多い。そのときの資源量というのは、生態物産、森林物産と言い換えてもいいと思うが、川勝さんの言われた物産複合のような形で考えると、中国、東南アジアがもっと重みを増し、西の方はずっと小さくなる。ユーラシアや、西アジア、西ヨーロッパはずっと小さくなる。インドはその中間ぐらいで、中国、東南アジアの比重はもっと重くなると思う。時代によってそれは変わるかもしれないが、少なくとも現在の状況は、このように捉えられるのではないか。しかもここは高い山ができたような形になる。このようなネットワーク図が描けないだろうか。全体のネットワークの理解という点では、家島さんの図でいいと思うが、東南アジア海域、南シナ海、東シナ海という世界の重みづけと、インド世界との軽重の比較をしなければ、本質的なことはわからないだろうと考えている。

森林というのは非常に重層な構造になっている。たとえ面積が少なくても、そこから出てくる資源量は非常に多く、かつ多様だと思う。全体を見渡しても、東南アジアから出てくる資源量は圧倒的に多く、まだ様々な物産

の、個別の統計を取る必要があるかもしれないが、物の動きと人の動きが、どういうネットワークを作っているか、一つずつの物を中心にフォローした方が、明確にわかるように思う。

家島　私の問題関心から言えば、いくら多様で多くの資金があっても、それを積極的に利用する人間と情報がなければ、資源は眠ってしまう。各時代の外世界との関わり方によって東南アジアの持つ意味と役割も、ダイナミックに変わってくると思う。確かにアラブの文献史料を見ていても、東南アジア産の物産は圧倒的に多く、なおかつ非常に多様であったことが分かる。8世紀以前から、香辛料、薬物、染料類、竹、藤、錫、金、蜂蜜、蜜蠟、象牙など、あらゆる森林資源が西アジアの市場に出ている。その意味では、交易接点としての東南アジアの存在意義は大きいと思う。

川勝　東南アジアは、北の東アジアと西のヨーロッパへ流れた第一の波の源であり、また第二の逆流波が入り込んだ海域でもある。その意味では、確かに東南アジア海域は東西の物産の集散地である。だが、単なる集散地ではない。同時に生活の場でもある。それをどう表現したらよいだろうか。

梅棹さんは『文明の生態史観』でステップと農耕地帯のダイナミズムを描かれ、ステップ世界が隣接する農耕地帯の中国やインドに及ぼした軍事力は強大だったとされた。それに匹敵する強大な力がある。それは経済の力であり、それを運んだのが先ほど述べた第一の波だ。経済力ないし市場の波が、アンソニー・リードの言う「商業の時代」を頂点にして、東南アジアから東アジアの方向と、インド・ヨーロッパの方向とに働いたのだ。それに対するレスポンスが、日本と西ヨーロッパにおける近代国家の形成だと思う。近代国家を形成させた波の源としての東南アジアの潜在力を認識するべきだろう。

東南アジア世界は「多島海」と呼ぶのがいいと思う。フィリピンだけでも1万4千余りの島がある。インドネシアもそれに類する島国である。島は海を存在の条件としており、さまざまな陸地世界とさまざまな海域世界を併せ持つ世界として、東南アジアは「多島海」と言えるだろう。

東南アジア「多島海」の豊饒さが近代の原点にある。ヨーロッパならびに日本の近代化は梅棹さんが言うような箱入り娘が温室に育った結果であったというより、東南アジアの多島海世界の豊饒な物産複合へのレスポンスとして出てきたものだ。レスポンスに成功することによって台頭した日本と欧米勢力が現代世界を動かしている。欧米・日本の近代化の生みの母としての重要性から推して、東南アジアの多島海世界の市場圧力は、乾燥ステップ地帯の軍事圧力に十分に匹敵する。東南アジアはその起点としての位置を得る。

濱下　物がどれぐらい動いたかという問題は、

琉球王朝の貿易の記録が500年にわたって、継続的な資料として残っている。朝貢貿易の域は出ないが、この時期を量的に捉えるという系統的な統計は、これで多少試みることはできるのではないか。

地域の広がりという形の基本はやはり近代で、そこでナショナリズムや、民族と国家などという形で地域を領域化する傾向が強く働く。すると、現在東南アジア研究で議論されている生活レベルと、資源から見たようなグローバルレベルとの間の問題がどう議論として提供できるのか。例えば華南の経済変化の背景にある歴史的変化は、東南アジアの現代的な課題に対しては、どのような問題を提供していくのだろうか。そこがバウンダリーの意味、あるいは無意味さに関わってくるようにも思う。

ネットワークとネットワーキング

高谷　先程の立本さんのネットワーク論は、生活者の立場からのもので、家島さんの言われる交易ネットワークというのは違う。ここのところをはっきりさせておかなければならない。中東と東南アジアを議論したときにも、ここのところがはっきりさせられていなかったので、結論に曖昧さを残した。立本さんの考えは我々東南アジア側にとって非常に重要だと考えている。仮にネットワークという言葉を放棄し、新しい言葉を使わなければならないとしても、考え方自体は非常に重要で、東南アジアの本当の像を出すためにはここのところが非常に重要だと考えている。繰り返しにはなるが、再度、説明をお願いしたいと思う。

立本　最初にやはり、ネットワークのレベルを理解してもらわねばならない。家島さんが言われたように、国家もネットワークに寄生して発生するという議論には同感している。ネットワークというのは、国家も、リージョンも、市場も、非常にローカルなところまでも、大きく全体をカバーしている。しかし、そういう組織体としてのレベルを考える場合、ネットワークは構造としての概念になる。

構造には構造物とストラクチュレーション(構造化)との二つの意味がある。家島さんも、ネットワーク再生化という言葉を使われており、この後者の構造化の意味が含まれた考え方になっていると思う。ネットワークには作り上げる過程(構造化)と、作り上げられたネットワーク(構造物)とがあるが、作り上げられたネットワークを強調しすぎている印象がある。

例えば周辺と中心ということについて、歴史的には決まったように議論されるが、東南アジアでは中心も周辺も流動的なネットワークであるというときの議論は、構造物を問題にしているか、生成過程(あるいは濱下さんの言葉を借りれば、臨時的過程)を問題にしているかという、その二つの違いだと思う。それを混同して、ネットワークという同じ言葉が使われる。

ネットワークのレベルという場合には、構造物としてのネットワークの方がわかりやすい。商業のネットワーク、国家のネットワーク、そういう様々なレベルのネットワークがあり、その一番下に、我々の言う人間関係というネットワークがある。

それまでをもネットワークと呼ぶから混乱するのだと言われるのであれば、ダイアリック・エクリビリアム、二者間関係の均衡関係というものにもう一度戻ってもいい。そういう社会関係のレベルから出発していることは確かであるが、ただ、東南アジアでは社会関係のレベルにとどまらず、述語的論理が働いて、上位のレベルの組織体のストラクチュレーションのときにもそのダイナミズムは続いていく。

この二者関係というもので国家間の関係を見れば、今までとは全く違う視点が出てくるのではないか。ただ、この二者関係という言葉では、理論的な呼びかけが少ない。そこで敢えて、ネットワークという問題のある言葉を使っている。

では、東南アジアのネットワークと、他のネットワークとはどう違うのか。私は同じであっても違っていてもいいと思う。他にもそういうところが出てくれば、このネットワーク理論で世界が切れるのだと主張できる。しかし、社会科学者としての私はそれでいいのだが、一方で地域研究者でもある私は、非常に困ることになる。社会学者としては、東南アジアの二者関係の社会関係の質をラジカルペアリングとして捉えてもみた。この例として一番イメージしやすいのは夫婦関係だと思う。全く関係のない男女が関係を作る。これは、エコロジカル・アイデンティティにも通じるのだが、このようなものが東南アジアにあるという議論である。

しかしこれは乱暴な議論で、非常に限られた社会関係の類型で世界を切ることになる。そういうことでは実際には世界を切れない。もう一方の地域研究者としては、東南アジアのプロトタイプとしてあるような熱帯多雨林という観点から、ネットワークの質を考える必要があると思っている。

どちらにしても、元々ないバウンダリーを我々は作って議論しているという意味では、組織原理のプロトタイプとして、東南アジアは本質を映す鏡である。そのように考えて、東南アジアを研究している。

高谷　それぞれが違う意味内容をもってこのネットワークという言葉を使うから、混乱ばかりが起きてしまう。立本さんの方で違う言葉を使えないだろうか。

立本　最近ではネットワーキングという言葉が出てきている。その議論に乗せるためにもネットワークという言葉を使っている。21世紀を見るときには、むしろ構造物のネットワークでは捉えきれない。ネットワーキングのネットワークが必要になる。

坪内　それならネットワーキングでもいいの

では。

濱下　この分類としての説明概念は、単独のものとしては理解できるのだが、その相互関係がどうなるのかが問題だと思う。ネットワークという概念で、家族関係だけが説明できるというのではなく、その社会的な広がりをも考えたい。家族は一つの社会的な結びつきであり、それが同時に経済関係、社会関係にもつながる。そういう形の異なるレベルの相互関係を考えたい。

さらにネットワークというものの位置を考える場合、経済史の視点からはマーケットという問題と、組織という問題、その間に位置付けてネットワークの機能を考えるとどうか。今までのネットワークは、マーケットそのものとしてのネットワーク、組織そのものとしてのネットワークであった。それはネットワーク論自体で全てを説明しようとする。しかし、非常に密なネットワークとして、我々は「組織」という言葉を持っている。そういうネットワーク論を相対化する意味で、ネットワークの位置というものを考えてみたい。社会学者としてのモデルメイキングの議論はわかるのだが、同時に東南アジア側からの規定性が非常に強いと思う。

東南アジアでのケーススタディが、今の議論に対応的に蓄積されていけば、また自ずと異なる議論もできてくるだろう。その場合はアイデンティティの議論も含めての議論になるだろう。だが、必ずしも地域アイデンティティが社会学の概念と対応して蓄積されているとは思えない。むしろ先行して議論されているのは、華人のアイデンティティではないか。

中国と朝鮮、東南アジア

宮嶌　立本さんは、華僑ネットワークというのは組織・集団であり、組織の構成員であることを基盤とする関係は、ネットワークではないとされたが、言い換えれば、東南アジアから見た中国人の作る関係は、ネットワークではないということになるのだろう。

だが、朝鮮から見ると、中国のネットワークは組織の構成員であることを基盤にしているようなものではない。その組織というのは非常に不安定だ。安定性を持ちえないものである。

川勝さんが言われたように、第一の波を受けて、朝鮮も日本も自己アイデンティティを確立し、長子相続に変わっていく。だがそれは儒教の概念とは全く相反するものである。それは完全な中国化ではなく、中国からある面を受け入れつつ、全く違うものを作り上げていく。

朝鮮の場合は一番強固な関係が同族関係であり、次は姻族、さらに学閥、同郷のような順位で、非常に強固な組織を持っている。それから見れば、中国の場合はそれぞれが非常に不安定で、一時的なものに思える。恒常性を持ちえない。そうすると、中国というのは

何なのか。東南アジアから見ればどうか。あるいは、流砂をまとめるものは何なのか。そこをもう少し議論していけば、お互いにかみ合う部分ができるのではないか。

坪内　朝鮮が周辺という立場で、中央からの影響をどう受けとめたときに、いかに純粋になりうるかという観点から、このことを考えていくとどうなるだろう。

これは以前に応地さんが報告されたことに、非常に影響を受けている。東南アジアにインド的な要素が入ってきたとき、本質が入ってきたのか、それとも影が入ってきたのかという質問をしたことがある。そのとき、応地さんは明快に「本質が入ったのだ」と答えられた。それは非常に認識を新にさせられた答えだったのだ。本場のインドでは様々な要素が混合され、それ自身が抜けきれない状況がある。しかし、その中のある要素だけを取り出して持ち込むことができるのが、周辺の特徴ではないか。

そうすると、朝鮮もそういうイデオロギーだけを受け入れて、それに基づいて組織化する。そういう辺境であったのではないか。

濱下　朝鮮の場合、例えば朱子学への対応などは非常に朝鮮的だと思う。中国のイデオロギーがストレートに伝わったというより、むしろ変わっていっていると思う。やはりタイプは二つあると思う。本来のものを維持していくタイプと、どんどん変えていってしまうものと。

坪内　それは変形してもかまわない。いま強調したいのは、その上澄みのようなイデオロギーだけが飛んでいくような形がありうるということだ。いかように変形させながらでも、朝鮮の社会がイデオロギーの純粋な部分を組み立てることができたなら、それは周辺の社会の特徴ではないかと思う。

それは日本についても強く言えることだ。儒教社会と言われながらも、その一番根幹を成すような「輩分」の概念を入れることがなかった。だが、日本の社会は中国の論理を一部的に入れる。それは全く違う箱で取り入れ、その箱に収まれば形としてなりうる。中国の父系社会が何かということなど忘れてもかまわない。本家という箱に収まれば、分家の出でも偉くなるような社会だ。養子というシステムを持っていて、平気でそこに入れてしまう。作り換えることはできる。でも本質部分、イデオロギーの部分というのは動いてきているのだと考えていい。そういう意味に限定して言いたいと思う。

宮嶌　もちろんそういう面はあると思うし、朱子が17世紀の朝鮮に生きていれば、これこそ自分の理想の世界だと言うかもしれない。しかし、必ずしもイデオロギーが純粋に守られているわけではない。祖先祭祀の儀礼においても、様々に形を変えている。単なる純粋化という面だけでは受け入れられない。イデオロギーという面だけでも説明が付かない。やはり、経済的な問題や、朝鮮の置かれてい

る社会的な問題の状況の中で、新に作り上げていく面は見逃せない。

坪内　イデオロギーでも、そこでの作り替えが純粋になりうると考えている。イデオロギー自身がそのまま純粋に受け入れられているとは言っていないつもりだ。

宮嶌　その意味ならば、おっしゃるとおりだと思う。

上田　動詞的、形容詞的ということから考えると、立本さんのネットワーキング論という発想は非常に共鳴するところがある。私自身の発想自体も、ある意味で人間関係というのは二者関係しかないように思っている。

ところが関係と言ったときに、どうしても仲の良い関係に限定されてしまう傾向があると思う。しかし、敵対関係も関係の内だと考えていくと、完全に二者関係しかないような場合、初めて出会ったときに敵対するか、友好的になるかは賭のようなものだ。その瞬間の賭で関係が展開していく。しかし、実際には、あらかじめその関係を設定していくための、様々な戦略がとられることが多い。

例えば同じ同類であるというカテゴリーを設定する場合、あるいは組織における上下関係という形での命令系統もある。初めて出会ったにも関わらず、あるルールを設定することになる。しかし、21世紀はその平準化が起こるのではないだろうか。一度それを解体して、敵対関係をも含みながら、人間関係をどう形成するかということになってくるように思う。

中国人が初対面の人と出会う場合のコンタクトのとり方を見てみると、友好的な関係を結びたいと思ったときには、同じカテゴリーを何とか探し出そうとする。例えば同郷の出身であるとか、同じ学校を出ているとか、それも範囲を狭めていくことで、関係を密にしていく。同郷の同じ県、同じ学校の同じ学年というような形で、二者関係を始めていく。

それに対して日本では、どこの会社の人間かというように、両者の所属を明らかにすることによって設定が行われる。ある程度の予測のつく範囲に、両者の関係を押し込めていくことがあると思われる。いずれにしろ基本は二者関係であり、まさしくネットワークの基礎になる動詞的な関係しかありえない。それが社会を形成する過程の中で、様々な集団やカテゴリーを生み出していくように思う。

生態の強さか社会の強さか

上田　最近は中国の森林の方に関心がある。その中での疑問の一つに、なぜあそこまでエコシステムを破壊できるのかということがある。中国人の場合には、エコロジカル・ビルディング・アイデンティティという印象を強く受ける。生態系に向かい合ったときに、それを作り変えていく。その在り方が中国人らしさを形作るように思う。

それを具体的に考えると、北を切り離す議論とも関わるように思う。中国人は華北の大

平原を対象にしたエコシステムを形成するテクノロジーの体系を持っている。それを南に当てはめようとする中で、風水というテクノロジーや、潅漑の様々なテクニックを編み出していく。あるいは複合としての技術体系を持っているということではないか。

そこでは、生態学的なまとまりを超えた物の流れが、非常に重要なポイントになってくる。それは差異を平準化する運動であり、クロス・エコシステム・トレードとも言い換えられるだろう。それにはおそらく二つの質が考えられる。

一つは、お互いの不足している部分を補い合う側面で、ある意味では平準化が進んでしまえば交易は終わってしまう。交易が無限大に拡大することはありえないことになる。ところが中国の場合、一定の山林から物資を奪い尽くし、一方的に変え続けていく。変えてしまえる意味で、無限定の拡大がなされている。そのようなトレードは、おそらく消費というものに結びついている。消費から需要が起こる。需要を作り出す文化的なテクニックが、そこに形成されてくるのだろう。

ボードリアールは、記号論的に作られた欲望というものが、現代を特色づけているという議論をしているが、そういう欲望の体系のようなものが、18世紀頃から世界を覆い始めてきたと思う。物に対する欲望が、文化的に作り上げられていく。例えばイギリスでは、それまでにはない紅茶を飲む習慣が広まっていく。中国では阿片を吸うことが、ステータスシンボルのように広告される。そこには広めていく、あるいはのめり込ませていくようなテクニックが存在している。元々需要のなかったところに、消費という形で、一つの文化的なものとして、欲望の体系を作り、無限定な物質の循環が可能になる。教科書的な三角貿易を作り上げる基礎になるテクニックだという印象がある。

欲望をある地点に作り出すテクニックがあれば、そのときに初めて三角貿易を人工的に作り上げるテクニックが生み出される。それによって物が流れる。今まではその逆方向に銀が流れ出ていたが、銀で決済しなくても、全体の収支をどこかで決済すれば、物は流れていくという体系が、18世紀頃に完成する。そのようなことと関連し、欲望の体系が形成されると同時に、中国の森林も欲望の体系の中で資源が収奪され、破壊され続けていく。

トレードの在り方そのものの質が、単に必要を補うだけの物か、あるいは近代的な意味での消費なのか、細かく分類しながら見ていくと、また違う面が表れてくると思う。

濱下　このような生態の問題は、自然生態と同時に、人間が社会生活の中で自然にどう関わるかという中での問題がある。このテーマは、東南アジア研究センターの生態学の議論と共通するものがあるはずだ。それは同時に「移動」というテーマとも関連づけられると思う。中国人の移動、あるいは華僑の移動に

しても、生態的な条件の規制があるように思う。だが、第二の波以降、生態条件、あるいは都市化という変化の中で、移民の範囲も目的も非常に拡大されている。ある意味ではインフラの整備の過程で生態も変化し、生態と社会生活との関係が出てくる面もあるのではないか。

古川久雄　中東と東南アジアの議論のときに、生態練度、社会練度という話をしたことがある。そのときには中東と東南アジアの比較というよりも、環境変貌という観点からの話だった。東南アジアの環境変貌を見る上で出てきた言葉である。

そのときの議論を簡単に繰り返すと、中東は東南アジアとは極めて対比的な生態環境を持っている。狭いオアシスに押し込められ、新石器時代初期には既に全てエクメーネは拓かれてしまった後はそこからディアスポラで他にいくか、あるいは道具立てを考えるか、制度を変えて、あるいはそれは宗教のようなものも含まれていくが、何らかの変革をして進まなければならない。

一方の東南アジアは瘴癘の森の地である。病気に対する体制が必要なのだが、それを獲得した人達にとっては、エクメーネは無限にある。従って開発がどんどん進み、現在もそれは進行中なのである。しかしその場合の人達も、錬度を何も持たないのではない。生態的な錬度はやはり高い段階まで持つ。それは生態環境を見て、穴場のような所を探し出していく。制度や宗教という枠組みを通じることもなく、ダイレクトに生態現象との対話をやってのけている。

宗教を見ても、アニミズムやシャーマニズムのような形であり、それはまた極めて高い段階になっていくのだろう。

中東と東南アジアの生態環境の対比は、一方は狭いオアシス、一方は無限の海と森である。その対比からは、社会制度から文化の面まで絡んでくるようなものが相当出てくるということだ。

阿部　上田さんの言われた漢人のエコシステム・ビルディング、環境改変能力の高さを別の言い方にすれば、彼らの環境非束縛性と言える。環境を選ばず、どんな環境にも入れる生き方・生活システムを漢人は持っている。ただそのシステムの維持には多数の人間が必要とされる。従って新たな環境への進出にはまとまった数の人間の移動を伴っている。

環境非束縛性と言いながら、一方で漢人は彼らが生きるのに得意とする生態環境がある。それは盆地という空間だ。雲南での漢人の移動パターンを見てみると盆地にこだわり、盆地伝いに盆地の環境を変えつつ移動していく姿が見えてくるように思える。

濱下　その場合、規模の問題については、どう考えられるのだろう。

阿部　東南アジアの移動パターンと対比してみると、漢人の場合は、ある程度システマティックに、コロニカルに動いているという

印象を持っている。それはやはり環境を改変していくことを必要とするからだ。個人として入っても変えられない。やはりシステムとして入らなければならない。それを漢人が盆地を中心に生み出してきた。土地に限定して言えば、それが彼らの生き様と捉えられる。これはもちろん、華僑ネットワークというものとは別の話になるだろう。

濱下　社会生活のインフラを移動させながらということか。

阿部　そこまで含められると思う。とりあえず今考えていることは、森林を破壊しながらでも、自分たちに必要な資源を収奪し続け、森林を破壊しながらエクスパンションしている現象が見られるということだ。

濱下　風水ということに関しては。

阿部　風水という考え方自体も、盆地というのが中心にあると思う。例えば盆地にすむ民は、漢族の他にもチベットやタイにもいる。だが、そうした人達の住む盆地は漢人の入り込めない生態としての盆地である。チベットは標高が高すぎ、逆にタイでは低すぎる。そういうことに関係して風水という考え方がでてきている。

濱下　東南アジアでは自然状況が非常に大きくて、それによる規定力が非常に強い。しかし今のお話は、自然条件を逆にもっていく場合で、人の側から自然を加工していく。その時には社会生活の側にシステムが備わっているのかという話になると思う。

阿部　人間の側、自然の側というよりも、むしろインターアクションの力関係だと思う。そこでの人の力と自然の力との相対的な関係だと思う。東南アジアのように人口が少なく、森は薄暗く深いという状況では、中国の場合とは全く違うものになると思う。

応地　今の場合も東南アジアの島嶼部からの議論だ。ところが東南アジアでもクメールやタイの中央平原、チェンマイのような大陸部をとると、本当に上田さんの言われたようなことと東南アジアは違うのだと、果たして主張することができるだろうか。エコロジーを強調するなら、同じエコロージー的な条件を持っているところでビヘイビアが違うというのを比較した方がいい。

阿部　確かに大陸部をとれば、同じ行動パターンがある。同じ土俵に乗せた方がいいというのもわかるし、そういう面で上田さんと話をすると、またおもしろい面も出てくるかもしれない。でもこの場合の中国と東南アジアという比較は、敢えて海の東南アジアで見た方がいい。

濱下　エコロジカルな共通性があるということは、盆地伝いに移民が起こっているということにはならないか。

阿部　漢人は入ってきている。しかし先程も言ったように、大陸部山地の盆地はまだタイの世界である。それは瘴癘性というものにも起因する。漢人が入ってくるのも19世紀の中頃から20世紀初頭で、その意味ではまだエク

スパンションの途中なのかもしれない。

移民と同化

海田能宏　移動の話を聞いて、色々考えていたのだが、上田さんがイメージされている三省の会うあたりの開拓前線での人の動きは、今のラオスから東北タイで人が動いているのと変わらないように思える。

東北タイでの人の動きを見ると、社会の成り立ちは人が動きやすいようにできている。男性に定住をよしとするような価値観は与えられていない。男性には不動産を分与せず、わずかの動産のみを分与して、動きやすくしている。それもバラバラに動くのではなく、システムとして集団が動く。周囲を観察し、人口と食料のバランスを考えながら、予定を立てて徐々に出ていく。親村と子村とは常に連絡を保ち、じわじわとそのエクメーネを広げていく。その広げやすいシステムを作っている。

上田さんは、東北タイでこのような研究をされた水野さんが見出した親族関係を「動詞的」と言われたのだろうか。それは二者間関係の無限連鎖のように捉えられているが、上田さんが中国の「形容詞的」と形容されたものと、実は何等変わらないのではないかと思う。人が動きやすいような社会組織を作りながら、じわじわとエクメーネを広げていった東北タイやラオスのイメージと、中国の平原から山地にかけてのそれは合致するように思う。

斯波さんが示されたタイの華僑の人口比率は13%だった。一方、都市中間層が近年非常に伸びてきて、今ではもう10%になったという。この都市中間層というのはタイ人あって、中国人ではもちろんない。。だが、最近ある人物が、「彼らはみんな中国人じゃないか」と言ったらしい。そこで反論が出るかというと全く逆で、みんな頷いてしまう。タブーとまではいかなくとも、そういう割り切り方が従来は避けられてきたのだが、言われてみれば、そのとおりだと感じるのだろうか。

それにしても、この華僑の比率の13%という数字と、中間都市層の10%という数字の一致には、非常に驚かされた。現代の華僑が都市中間層のほとんどを占めているのではないかと、私も密かに思っている。

その彼らがどのように受け入れられているのか。斯波さんの話では、タイでの華僑は同化が進み、シティズンシップやナショナリゼーションは解決済みということだが、私は必ずしもそうではないと思っている。

例えば、東北タイのラオ系の人達の住む村に、コラートから婿入りをしてきた男性がいた。ラオ人にとってはタイ人というのは非常に遠い存在で、婿入りしてきた男性は一人浮いてしまう。非常にまじめな働き者で、色々な工夫をしながらきわだってユニークな農業を営んでいるのだが、村人に言わせると「彼はタイ人だから特別さ」ということらしい。

華僑を中国側あるいは華僑側から見た場合、懸命な努力でうまく同化したと言い切れるのかもしれないが、受け入れた側からは、同化しているとは思わず、全く異質の集団として見ているのかもしれない。

タイではこれから都市中間層が政治的なパワーを持ち始める可能性がある。その時には、農村を基盤とする政治勢力と、この都市中間層、いわゆる華僑を中心とする政治勢力とは、どこかでぶつかり合うようなことが起こりうる。斯波さんの解決済みという考えには、まだ頷けないような気がするのだが。

斯波　タイにおける同化の問題は、インドネシアなどから見ればましだという、相対比較の上での濃淡として示したつもりだった。その中でタイの場合は、ナショナリティは本人の選択で決まる。その他に、タイ人になれば、上層社会に入れるし、宗教的な障害も少ない。こうしてみると、タイではかなりの中国人が、既にタイ化している。

そういうことから見れば、タイとカンボジアでは、同化はかなりうまくいっている。フィリピンでは、宗教的同化政策で、フィリピーノになってしまった。マレーシアと、特にインドネシアでは問題を抱えているというのが一般論だ。

人口比率を問題にする場合、同化程度の基準というのが実はわからない。16分の1とか、32分の1まで数えれば、数字はもっと大きくなるだろう。ただ、中国人の特質として、最終的に都市に集まってくる。これは本土でも見られるし、オーストラリアの華僑にも見られる現象だ。その意味では、都市中間層に華僑が入って、高学歴にもなっているだろうと思うが、現地で受けた印象としては、全てがそんなにうまくいかない面がまだありそうだ。

ただ、同化した中国人でタイの官僚になった人が、「タイ文明こそが文明であり、金儲け主義の中国人は野蛮だ」と言っていると、スキナーの本に出てくる。タイの場合は、中国人性がいつまでも続くとは思えない面がある。

応地　今回の議論を聞いていると、中国の方はもっと細分化し、北部の乾燥地帯は範囲からはずすとか、東南アジアの方は熱帯多雨林多島海的な世界のみを扱おうとしたり、何かそういう部分に逃げ込んでいる印象が否めない。私はむしろ、中国と東南アジアのことを議論するならば、東南アジア大陸部ははずせないと思う。

海域ネットワークを見ると、垂直的に海域世界が並んでる。その一番の特徴は、旧大陸の中で物が動くと同時に、強烈な人の動きがあったことだと思う。タイ人のように、山を越えてオーバーフローする人もいれば、華僑と呼ばれる形で、海から来る者もいる。しかし、その移動空間はカルカッタ止まりで、そこから先のインドには入らない。東南アジアでも基本的には大陸部を超える範囲ではない。そのとき、どういう形で大陸部に中国人が入

ることができたのか。その議論が必要ではないのか。

今の国民国家が確立する、あるいは確立しようとしている動きの中で、アイデンティティの変容が求められている。その中で中国人達が、宗族なら宗族、あるいは地域集団なら地域集団というアイデンティティだけで、なぜ活動することができたのか。あるいは過去においても、それ以外の形でアイデンティティで自己形成しなければならなかったことがあったのか。

そういう形で、東南アジアと中国との関係の中で、東南アジア大陸部というものをどう理解するかということが、一番重要なポイントだと考えている。それが島嶼部だけの話で、全然違う部分ばかり強調していくのでは、質の違いということで終わってしまう。

濱下　今後、相互乗り入れのような形で、東南アジア研究者が東アジアを、東アジア研究者が東南アジアを議論分析し、それらが蓄積されていけば、おそらく一方向的に主張される地域像というのはなくなると思う。

家島　東南アジアでは、中国華僑だけではなく、同時にアラブ、イラン、インドなどからも、かなりの数の人間を受け容れている。東南アジアに移住したアラブのほとんどは南アラビアのハドラマウト地方出身の人々で、14、15世紀から始まり、18、19世紀にはオランダ人と現地のマレー人とを繋ぐ中間役としてかなり活躍している。19世紀の資料では、月に1回のシンガポールと南アラビアのムカッラーの定期航路で、1000人単位の人がハドラマウトから直接シンガポール、そしてスラバヤやマドゥーラの方へ移っている。同時に、インド・ムスリムも流れ込んできている。

中国華僑、インド、アラブ、イランと、同時的に受け容れることができる、非常に包容力のあるソフトな世界が東南アジアである。それはいったい何なのか、どうして可能なのかを十分に考えていく必要があるだろう。

その一つの答えには、東南アジアが様々なフロンティアという、外の人間の移り住む可能性があったからだろう。労働力や資本などを加えれば、開けるフロンティアが非常に多く存在していた。森林資源が豊富なこともあるだろうし、また、海域という隔離性も外の人間を受け入れ易い要因になっていると思う。外の人間が入ってきても、それを力によって排除する中央集権的国家が育ちにくく、外の人間を受け容れ易いという政治的・社会的条件等々の様々な条件が東南アジアの特殊性を形造ったと思う。

濱下　確かに移民研究の議論でも、今まではプッシュの要因が強調されてきたが、今ではプルの要因が強いと言われ始めている。そして、出稼ぎで来て、その後往来するという距離を保っているということも、現在の移民研究の大きな方法になっている。

坪内　東南アジアの島嶼部で考えるか、大陸

部で考えるかというので、議論は相当違ってくる。確かに中国から来た移民でも、一部には農業に携わる人達もいる。だが、これも時期を分けなければならないという意味で、議論しにくい問題でもある。

確かに農業をしていた人達もいるが、大部分は都会に来たということを考えなければならない。そして、都会に来た人達が確かにソフトな社会に溶け込んでいく部分もあるが、自分たちのコミュニティを作り、それを維持しながら共存をはかってきた側面も考える必要がある。これはアラブでも同じことで、コミュニティを形成し、それが東南アジアに存在することによって機能的な役割を果たす。荒っぽく言えば、これが主流だと思う。

そこから考えると、東南アジアが華僑やアラブ人、インド人を受け入れる形というのは、決して柔らかく訳の分からないように受け入れたのではなく、一部に受け入れ、コミュニティと土地の人との関わりという弾力性を持ったものだったと思う。あるいはもっと構造的なもので捉えておかなければ、誤解を生む部分が出てくるだろう。

斯波　19世紀あたりの話で、バンコクで農業をしていたのは潮州人が多い。タイの山林には海南島の人が多いと言われている。つまり、彼らはマラリアの免疫を持っていたということがあった。マレーシアの錫鉱へ行ったのは客家で、山間地の出身者達で、鉱山採掘を得意とする。珠江デルタの人々は農業土木、港湾土木の技術を生かして、鉄道建設やゴールドラッシュに行っている。

このようなアレンジを誰かが行っていたのではないか。全体に一種の分業があり、スペシャリストを要所に送り込んでいる印象を受ける。労働者がそのまま行くのではなく、シンガポール等にいる福建や広東の商人達が、計画を立て、口入れ屋になって送り込むようなことがあったのではないだろうか。

濱下　土地問題は現地政府の政策的な問題があり、中国人は土地を持てないという規制政策も影響しているように思う。マレーシアでは北の一部に、歴史的に農業を行う中国人もいるが。

坪内　ある時期から、政策的にそういう面がはっきりしてくるが、その前の段階では中国人も土地を持てるような形で受け容れられている。中国人の入り方がずっと古い所では、土地の人と同じように、中国人にも土地を持つ権利が与えられている。ただ、南部に行くと、やはりずいぶん様子は違ってくる。

20世紀前半を念頭に置くと、やはり都市にしか来ないし、苦力、あるいは商売人としてしか来ない時期がある。だが、歴史を遡れば、農業的な開拓にずいぶん入っている所はある。

それから、錫鉱で入る人が来て、クアラルンプールという都市ができている。それがまた都市として中国人を受け入れて、膨張するような経緯もある。確かに時代的な区分と住み分け、どこから来たのかというのは考えな

ければならない問題になるだろう。

それにも関わらず、中国人が中国人としてコミュニティを作ったのであり、なかなか交わらない側面が絶えずあった。そのことを考えねばならないと思う。峇峇という世界は確かにあるが、全てがそうなったとは言えないように思う。

濱下　東南アジア側が政策的に華僑の経済力をどう吸収するかによって、変わるものもあるだろう。戦後、日本が退場してから、華僑の経済力を使って復興し、経済的な上昇を見るが、60年代には華僑を叩き始める。これは政策的な違いもあるし、同時に中国からの革命の「輸出」という問題もあるが、国別に見る側面と、動きとして一体であるような流れがある。そしてもう一つの波は、やはり現在、華僑と言われる人達の経済力をもう一度活用する形になる。おそらく一貫してそういうものが背景にあった。それが現在になって、認知されてきたということなのかもしれない。

また、「中国人」というのでは大摑みすぎるということがあるのかもしれない。各々の方言グループがあり、それらが中国から直線的に東南アジアに行ったのではなく、色々な経過を経て、順次に適応しながら到達した場合に、お互いが条件付けあっている側面があるかもしれないということだろうか。

中国と東南アジアの間に、そういういくつかの媒介項、あるいは中規模概念でブリッジするようなものを分析方法の中に加えていくことで、それが生態的な問題、エスニックグループの問題、あるいは移動の様々な手段の問題等を考えることにつながるのだろう。

なおかつ、それが「中国人だ」とアイデンティファイされる場合は当然ある。地域アイデンティティや自他のアイデンティティの問題も、依然として生きているということにもなるという指摘だったと思う。

松原さんからは、モンゴルという時代についても考える必要があるという指摘が出された。一つの視野の下で、中国と東南アジアを考える、あるいは比較する場合には、やはりもう一段広い地域像、地域観を想定し、時間的には、より長期の歴史的な幅を想定して考える必要があるだろう。その視点から、少しお話を伺いたい。

ナメクジの移動と虫食いの移動

松原　やはり移動をめぐる問題が、この議論の中で一貫して流れている。それはネットワークとかなり密接に結びついている。ある程度この移動の質について、整理しておく必要があるだろう。高谷さんからは生活の場としてのネットワークが出ていたが、家島さんが扱われている交易ネットワークは、構造的に組み上がっているものだ。やはり、生活の場での移動と交易の場での移動というのは、かなりの質的変換が起こっているだろう。

これをどう整理すればいいのか。立本さんが出された敢えてネットワークとされている

モデルを組み込む形で、どういう構成が可能なのか。東南アジアを中心とした地域間比較研究の最終的な結論に向かうためにも、そこをめぐる議論はきちんとしておくべきことだろう。

ネットワークや移動は、様々な差の問題を持っているが、ある種の神経系のようなものを発生させている。自と他というようなものをつなぐ神経系のその在り方、構造の違いが、質的、歴史的に様々な要因の中で、質的な転移を遂げている。その積み上がりのようなものという漠然とした印象がある。現象的な神経系の上に、大脳中枢を持ったような神経系が構成されていく。そこのレベル、相違の厚さの中で、この議論は堂々巡りをしている印象を受けた。

移動の質については、ユーラシアの乾燥地域にずっと関わってきたということで、私自身がこの問題を考えねばならない事態に立ち至っているが、今のところは印象論的なことしか言えない。生活レベルでの移動を見ても、中国の移動と東南アジアの移動では、その質はかなり違うものだと思う。

比喩的な言い方しかできないが、漢族の世界で起こっている移動は、非常に粘性が強いもので、巨大なナメクジが動いているような印象がある。逆に草原の世界の移動は、風のような移動だと思う。山や木があれば、そこに吹き付けていく。風が吹いて木があることがわかるようなそういう非常にサラサラとした移動の仕方だと思う。

東南アジアの移動と似た印象もあるが、やはり違うと思う。草原世界の移動は全生活体系を抱えて移動している。家族も家畜も含めて、常にサラサラと移動している。一方で彼らは暴力装置を持っていて、移動する先々で衝突を起こし、その跡をずっと残していく。それがユーラシア大陸の歴史変動の一つの内燃機関となり、これが歴史を動かしてきたのだと思う。

東南アジアの特に島嶼部は、やはり移動する民の世界だが、彼らは本当に密やかに移動する。このような質の違いは、フロンティアの問題にも起因するのだろう。人々を害することなく、密やかに移動していく。ただ、焼き畑農耕を生業とする人々は、やはりある種の暴力性を帯びている。だがそれにしても、草原の世界の暴力性とは、質がかなり違うと思う。

例えて言えば、表現は悪いかもしれないが「虫食い」のように、広いニッチェの中にポコポコと入っていく。男だけでいく場合もあれば、家族連れでいく場合もある。どうもこのような違いがあると思うのだが、まだ印象論にすぎない段階だ。抽象度を高める必要があるし、ユーラシア・アフリカの世界まで考える必要があるだろう。いずれにしろ、そういうことが東南アジアを考える一つの手がかりになりそうな気がする。

13世紀の世界について、もう少し補足して

おきたい。世界史の変動を海域世界で見た場合には、川勝さんの整理されたものでいいと思う。そこに至るまでにいくつかのポイントがあったと思うが、それをどこにとるかということで、非常にシンボリカルではあるが、13世紀のモンゴルを挙げたいと思う。それはフビライに象徴されるという議論がある。海域世界と草原世界が、一つの帝国として制度化され、草原から海にまわっている回路をつないでしまった。それによって様々なレスポンスが世界中で起こることになる。その中の一つとして、ヨーロッパの反撃、逆流ということも視野に入ってくる。これが草原世界の持つ内燃機関の一つの到達点であった。

その後は草原世界は主役になりえないのだが、たまたまその時代に回路がつながり、全体に電流が流れた。その結果、それぞれの地域で違った反応が起きてくる。それが近代という世界史を作る一つのターニングポイントになったのではないか。その意味で、13世紀を評価すべきだと考えている。

東南アジアでも、それに対応して様々なレスポンスが起きている。壊滅したようなところもあるし、そうでないところもあるが、それを契機とした反応はかなり大きかったと思える。

これから先の議論は、やはりそういう全体性を前提として捉え、東南アジア世界の独自性をあらいだしていくことになるだろう。それが東南アジア研究センターの役目ではないでしょうか。

立本　非常にわかりやすいイメージだ。ただ一つだけ聞きたいのは、虫食いとサラサラした風の違いは暴力装置の違いであるというのはよくわかるが、粘性とサラサラ・虫食いの違いで、粘性の方に暴力装置は入っているのか、あるいはその粘性の度合いを説明してほしい。

濱下　東南アジアが虫という主体ならば、虫食いの虫とは、どんな虫だろうか。

松原　漢族の広がりの背後には、もちろん暴力装置を全体として持っているだろう。これはどこかで宗族の問題とも絡むのかもしれないが、やはりある種のセットになったシステムを作ってしまっている。セットのままパッケージで持ち込む。それは草原の世界から見れば、非常に粘度が高いネバネバとした世界に見える。

それはやはり抽象度の高い世界についても言えることだと思う。風のように移動する民の思想世界は非常に透明感が高い。ややこしい魑魅魍魎的なものがスカッと抜けている。そんな比喩ができると思う。

虫という表現はもう少し適当な表現に変えなければならないと思っているが、主体は人間だと思う。

上田　私も粘性というのは非常に強く感じていて、中国がナメクジだというのは共感できる。中国人の移住というものを華南に対する移住、あるいは南進という形の移住で見てい

くと、まず自分たちの生活できるニッチを目指して、ポンと入っていく。それも盆地の一番ジメジメしたような所は入れない。山の森の深い所にも入れない。その中間の扇状地のような所に入って、そこを軸にしてだんだん上下に居住地を展開回転していくようなプロセスは本当に粘性が高い。そこを軸としてずっと作り上げていく。

そこへ後からさらに、また違う技術を持つ漢族、おそらく方言単位ということもあるのだろうが、また別の移住の波が新たに入り込んでいき、いくつかの波を繰り返しながら、漢族が住むという意味で、その地域を均一の状況に作り上げていく。このように、景観、エコロジカルな環境を変えていく一連の強力な技術のセットやシステムを持っているような移住であり、それが粘性ということに表れてくるのだろう。

それに対して虫食いというのは、尺取虫というイメージが浮かんできた。自分が入れるようなニッチ、自分の持つ技術に適合的なところを目指して、ピンポイント的に移動していく。そこを軸にまた次を目指して動く。東北タイでも、日照りが続くと森の際にポンと入って、そこを軸に枝村を作っていく。全体的な空間の中から、自分たちの得意な生活環境を選びながら移動する。それは尺取虫のように、頭を上げて次の着地場所を選び、また胴体を移して進んでいくイメージがある。

このような比喩は言い得て妙だが、当事者の前では言いにくい。もう少し当たり障りのない用語に磨き上げなければならないだろうと思うが、非常に説得力のあるアイデアだと思う。

多様な研究視角

応地　今回の中国側からの東南アジアへの問いかけとして、三つの話題提供がされているが、斯波さんの華僑の話は、中国人の南方進出というコンテキストで、プレゼンテーションとしては非常にわかりやすかった。だが、その後の上田さん、宮嶌さんは、宗族・同族という、非常にスペシフィックな問題から話題提供されたように思う。

ネットワークというものでこの二つの地域をつなげながら、それぞれの構造を論じようという場合に、宗族は中国のネットワーク論に対してどういう意味があるのか。また、そういうものを絡めることによって、東南アジアからはどのような反応、あるいはカウンターコンセプトの提示を予想していたのか。そこを聞けば、何かつながる気がするのだが。

濱下　インドの場合では、つながりというものがスムーズに議論できるようなものがあったのだろうか。

応地　個々の現象を乗り超えて、地域間比較をしようという場合には、親族関係というようなものよりも、ヒンドゥー世界というものをどう捉えるかという話を持ってくる。中国とインドであれば、文字や知識というものが、

どういう形で社会の中に存在し、開放され、または秘せられていたのかという、独占と開放のメカニズムを議論したいと思う。そしてそれを通じて統治がどの様に形成されているかというところを比較したいと思う。今回、なぜ中国において宗族を取り上げたのか、なおかつそれに対する東南アジアからのどんな反応を予想されていたのか。そこが知りたいと思う。

濱下　それはまず、私がお詫びしなければならないだろう。「これが中国だ」とトータルに示せるとは思っていなかった。それで、それぞれの専門分野からの関心事項を切り口として、それぞれの中国の捉え方を発表してもらう形をとった。だが、ある程度予想はしていたものの、東南アジア側からは「東南アジアはこうだ」という非常に強いイメージが出されてきた。確かにもう少しトータルに中国を出すべきだったのだろう。

上田さんのテーマでは、ハイラーキカルな宗族から持ち上げていった議論ではあるが、それを統治機構や権力、統治のイデオロギーや理念という問題に、もう少し焦点を当てていくこともできるかもしれない。ただし、東南アジア側でも、生活レベルとグローバルレベルの中間領域があまり出てこなかったという意味で、おあいということになるかもしれない。ただ、歴史的な経過を特に問題にしたとき、ヒンドゥーイズムという形でインドの歴史性が非常に響いてくるようなものとして、やはり中国社会は歴史的に中華や華夷秩序をめぐる地域秩序を大きく持っている。その点の提示が無かったのは、確かにおっしゃるとおりだったと思う。

ただ、ネットワークという議論で、より基底的な家族関係から、より広範囲な商業ネットワークまで説明するために、それぞれが出された切り口を全体性の把握に向けてどう考えていくかという議論ができないかということだ。話のパターンの中に分類を精緻化する方向はあったとは思う。だが、その相互関係をどうとらえるか、あるいはその前後に因果関係があるのかないのかという問題がある。その場合、中国の強い社会的な結びつきとして、宗族、同郷、同業というものがあり、それぞれ人類学、歴史学、あるいは経済学の研究テーマとして別々に研究されてきた。しかし、その社会の一人一人から見れば、それぞれに関わることである。今までは結合の基礎として、宗族、同郷、同業が置かれてきたが、むしろそれは結果として現れるものだと考えたい。

そこで先程も述べたように、三者をそれらに通底する股(株)という理念で捉えようと考えている。股は関節を意味するもので、皆が股を持っていて、股を結びつけることによって身体ができあがるように、中国の社会が形成されるイメージと重なっている。

その意味では、神経系としてのネットワークというのは、神経の結び目のようなところ

に、それぞれ人が位置しているようなイメージで非常に理解しやすいものだった。そういう様々なアプローチがある中で、私としてはディシプリンのレベルで地域を描く場合の問題性を感じる。

経済というディシプリンからネットワークを位置付けるとき、マーケットと経済組織の相互作用という形で浮かび上がる地域がある。その点に比べ、立本さんが出されたディシプリンは非常に強力で、ディシプリンが地域を飲み込んでいくような印象がある。ディシプリンが地域を描くことができなくて、地域は別のところから来て、そこにディシプリンを議論するような面がある。それは特に地域研究の課題としてあるように思う。

それぞれのディシプリンは、それぞれ別の地域像を描けると思う。経済史であれば市場であり、歴史であれば暦から見た時間を共有する地域を描くことができる。暦を与えることで時間を支配する。中国の暦をもらった東南アジアの一部は地域を共有することになるが、一方で仏暦もイスラーム暦もあり、時間支配の面からは、地域は重層的になる面が見られるかもしれない。

ディシプリンと地域の関係も、中間レベルの議論を埋める場合に、まだチャレンジすべきものがたくさんあるのではないかと考えている。その点では、応地さんの指摘のような大きな部分が残っているだろう。それにも拘わらず、多くの議論が交わされたのは、非常に有り難いことだった。

川勝　応地さんの批判はもっともだ。上田さんの「輩分」論は二者関係を主題にしたものだが、個人に還元した議論からは地域像は出てきにくい。一方、上田さんは中国らしさという生活様式に触れられた。むしろこちらが重要だと思う。人間は白紙の状態で生まれてくるのではなく、与件の中で生まれてくる。どのような与件の中で生まれてくるのか、その解明が地域社会論の一つの鍵だ。

中国人がなぜ東南アジアに入れたのかという問題は、なぜ中国人がインド、日本、韓国のような農業社会に入れ込めなかったのか、また草原地域に入り込まなかったのかという問題に置き換えられるだろう。それを松原さんの出されたビジュアルな世界史像と併せて考えたい。

西ヨーロッパと日本はモンゴルの征服地域に入らなかった。元寇は失敗し、西ヨーロッパへの進出はハンガリーで止まった。だからといって影響がなかったわけではない。風のごときモンゴル人は病原菌も運んだことを忘れるべきではない。西ヨーロッパでは人口の3分の1が失われた。日本でも人口減少は見られた。中国でも相当減少し、中東でも類似の人口激減が報告されている。モンゴルは全世界を病気で結び付けた恐るべき人喰い虫だったと言える。疫病に対して人々がどのように対応したか。西ヨーロッパから日本までの東西両端にいたるまで、ユーラシア大陸の

沿岸部に生活していた全ての人が東南アジアに集まった。海を渡って東南アジアへ行った。そこに海域世界として東南アジアが浮かんでくる。東南アジアは疫病に対する各種の薬を提供した。もちろん、そこに中国人もやって来た。

「移動」の対概念は「定着」である。中国人は草原地帯に定着しなかった。草原は農業ができないから、中国的生活には適さないからだ。一方、日本、韓国、インドにも入り込まなかった。そこには、既に定着型の農民が住み着き、中国人特有のナメクジ型移動の物産複合、あるいは生活セットの持ち込みを許さない地域社会がすでに形成されていたからだ。

しかし、東南アジアではそれを許した。それは、何よりも東南アジアが定着型ではない世界として存在していたからだろう。別の言葉で言えば、元々、東南アジアは人々が『所有』という概念を持たない『無主の地』であったからだと考えられる。誰の物でもなく、誰の物でもあるようなところであり、入り込みやすい地域なのだ。そのような無主の地へ所有概念のある者が入り込めば、たちまち取られて虫食いになってしまう。マラッカをポルトガルが占領したとき、マラッカのスルタンは三日間旅行に出た。それまでは略奪に来る者たちは用が終われば引き上げてしまう。ところがポルトガル人はそこに居座った。所有したのだ。中国人も、ヨーロッパ人と同様に東南アジア世界に定着して排他的な『所有』という新しい要素を持ち込み、虫食いの状態にしてしまった。

東南アジアは元々『無主の地』であったとすれば、海もまた誰の物でもあり、誰の物でもない『無主の地域』であることを特徴とするから、やはり東南アジアは海的コンセプトで捉えた方がよい様に思う。

上田　応地さんの質問に対する答えだが、私の話は結果的に宗族がクローズアップされてしまって、私の問題意識の部分はあまり議論できなかった。子育てというところに着目して、議論が展開できれば面白いのではないかと思っていた。

中国人、あるいは中国というものが、元から存在していたとは考えていない。ある意味では育て上げられていく。中国人になるプロセス、あるいは中国になるプロセスというものを議論したいと思っていたし、東南アジア側からは、東南アジアの人間になるプロセスというものがどういうものか、それが中国とどう異なり、どのようなところで重なるのかを知りたかった。

もう一つ中国について言えば、明・清の時代を調べていくと、特に明の時代は今の状況と似た部分が見られる。例えば、朱元璋が毛沢東であり、永楽帝が鄧小平のような形で、路線対立が見られている。朱元璋は毛沢東のようにやや閉鎖的で、中国を中心とした朝貢システムに基づいて、中国らしさを出そうと

する。一方永楽帝は鄧小平路線のように、中国中心ではあるが、改革開放を打ち出し、モンゴルが形成した世界の広がりの中へ、積極的に関わろうとした。

朝貢システムが古来からのもので、それを中心とした中国の考え方が強いが、特に明以降の朝貢システムというのは、モンゴルが切り開いた地平に対する中国的な対応の結果、中国側がイメージしたものであり、必ずしもそれで全てがイメージ通りにいっているわけではない。いたるところで齟齬が出ていることが考えられる。

ある意味で、明・清の時代は、モンゴル帝国から離脱して、中国になるプロセスというものを考える必要があるだろう。清では逆にモンゴルらしさを引き継ぐ部分も見られ、ますます微妙な問題を含んでいる。そういうものから中国というものを捉えていければと考えている。

宮嶌　東南アジア研究者がイメージされる中国像を聞きたかったと思う。だがここで出された議論は、中国でも北中国を除く、あるいは細分化するという話があった。そういう発想は何か根本的に違っていると思う。

普通、中国からイメージされるものは、朱子学、科挙、宗族という、ほとんどが宋代以降に出てきたものだろう。言い換えれば、北中国で文明が完成され、その担い手である漢族が南へと膨張していく過程で出てきた一連の制度であり、イデオロギーであり、それが現在の中国というものでもある。北と南はむしろ分けられないものとしてある。北を除く場合に何を除くかを考えても、結局は何も除けない。

現在の中国でイメージされるものは、漢族の膨張過程の中で形成してきた諸々のものであったと思う。それは朝鮮や日本でも同じような経過を辿るが、18世紀には開発の限界にきて定着してしまう。中国ではそれが依然として引き続き、人口も膨張し、膨大に拡張し続けており、現在までその歯止めとなるものはない。言い換えれば、発達限界に達したところで、ハードな制度が生み出される、その過程を経ていないのが中国なのだと考えている。このような中国像と、東南アジア研究者の捉える中国像というのは、かなりイメージが違っているという印象を強く受けた。

斯波　私の話題提供は、華僑を時間と空間という２次元で考えたものだったが、立本さんがコメントで出されたチャートは非常に質が高くて、５次元ぐらいのものが盛り込まれてていると感心して拝聴した。

私なりに考えているネットワークは家島さんのものに近いと思うのだが、立本さんの出された三分法は非常に役立つ論理的な考え方だと思う。二者関係ということでは、儒教資本主義というのはまさに関係ができたこと自体を重要視するもので、市場で知り合った人達というのは、経済的なことだけではなく、嫁の世話や融資など、様々な裏の手当も含ん

だ関係になる。ネットワークと言えば、そういう関係になるのだろう。

その次に二者関係とメーンバーシップの中間項として、濱下さんの出された「股」というようなパートナーシップが考えられるのではないか。メンバーシップは、追い出されれば、関係を持てなくなるようなもので、華僑で言えば、むしろ同郷、同業の関係だと思う。何かへまをすれば、面子を失い帰れなくなる。あるいはチャイナ・ボーン・チャイニーズが来れば、中国の様式を完全に背景に持っており、そのシステムというところで、宗族的なものがあるだろう。このような形で考えれば、この三分法は非常にバランスのとれた考え方だと思う。

それから、熱帯雨林、多島海、海域、森、小人口というキーワードから、中国との接点を考えてみると、やはり上海から南が考えられる。同じキーワードで捉えられる世界がそこにあり、非常にファミリアな土地だという考え方がそこにあっただろうと思う。ベトナムにも宋の時代に2万人余りが入っている。そこからタイへ流れた者もいるだろう。カンボジアでは宋代の初めから、中国から小麦や豆を輸入しているし、物産事情も詳しかったようだ。歴史上では明確に出ては来ないが、このようなファミリアリティがポピュラーなところだったということはあるだろう。やはり雲南も含めて、そういうところをもっと話すべきだっただろう。

移動について考えているのは、華僑に関わる移動は、やはり商業化した社会における出稼ぎであり、アップワードで動いているということだ。1世紀ぐらいはあちこちに行って、キーステーションを作り、また動いていく。江西省から湖南省、また湖南省から雲南省というような動きが見られる。もう一つ科挙制度という面からは、垂直移動も見られる。

中国人の移動の場合、村から市場、市場から都市へというゴールが一応あると思う。坪内さんが言われた都市へ向かう華僑というのは、そういう形なのだろう。農業で入る場合も、単なる農耕ではなく、ベジタブルファーマーや、プランテーションという形だろうと思う。鉱山労働者になるのも、そういうものに関連していると考えている。

大阪の華僑の人にインタビューしたとき、彼は「インジネシアほど行きたい所はない」と言う。インドネシアでは華僑が敵視を受けている状態がある。それに比べれば、タイは理想郷と思えるが、それでもタイではなく、インドネシアなのだ。日本は一番やりにくい。インドネシアは非常にやりやすい所らしい。それが何故なのかというのは、何か相通じるものがあるからなのだろうか。また考えていただければと思う。

まとめにかえて

高谷　最後にまとめに入らならければならないが、その前にお詫びをしなければならない。

東南アジアも確かに多様な世界で、大陸部と島嶼部では非常に大きな相違がある。それにも関わらず、世界的に見た場合には、その本質は島嶼部東南アジアにあるだろうという独断に基づいて、いろいろのことを考えてきた。このことについては、我がB03班のメンバーにも話はしていなかった。それ故に、応地さんなどから大陸部を議論しなければダメだという指摘も出てきた。東南アジアの範囲に関して皆が少しづつ違ったイメージを持つようなことになり、従って齟齬が生じたのは私の責任だ。お詫びしたい。

しかし、それにも拘わらず、今回、色々な示唆を与えられ、非常に多くを学ぶことができた。まだまとめることはできないが、二日間の議論から私が得たイメージは次のようなものであった。個人的なイメージなのだが、提示してまとめの代わりとしたい。

北の草原、中国、それに南の東南アジアを、松原さんは風とナメクジと虫喰いの世界になると言われた。誠に絶妙な表現だと思う。こうするとまず最初に風と虫喰いありきという世界が考えられるのではなかろうか。北にアルタイの風があった。まだ中国というのは現れていない。南には虫喰いの熱帯多雨林多島海というものがあった。その原初の姿は大きく分ければ、北のアルタイと南のタイという分け方ができるだろう。

東南アジアというのは、非常に古い昔からあって、その極めて古いところまで歴史を遡っても、既に今と同じ様なものが存在していたと私は考えている。熱帯多雨林多島海である、東南アジアの島嶼部ではつい50年程前までまだ農業が皆無であったが、それは原初の東南アジアとほとんど同じものであったと思う。その有り様は例えて見れば、日本の農業が皆無であった縄文時代のような生活だったに違いない。森の恵みを採取し、魚や貝を捕り、獣を追うような形で動いていた。加えてここはバイ菌が非常に多くて、バタバタと人は倒れていく。豊富な森はあるものの、大勢の人が森に殺され、虫喰い状態に穴が空いていた。そういう世界だったと思う。

中国というのは、弱い森に早くできた文明圏ということなのだろう。ここにも森はあった。だが東南アジアのような常緑林ではなく、落葉樹主体の混交林帯である。衛生環境はそれほど悪くない。そういう所へ人間が入ってきて、人口の増加と共にシステムを形成し、中華文明というものを成立させてきたのだろう。そこには、立派な中華風の生活システムも作られた。それがナメクジなのだろう。

中国本体部の混交林と東南アジアの熱帯多雨林多島海の間にはもう一つ別の森林がある。熱帯モンスーン林である。ここの盆地に入っていったナメクジというのもいるだろう。この森林区の盆地は混交林よりも疾病性が高かったから、中国東南部よりも開発は遅れた。しかし、熱帯多雨林よりも開発は早かった。この部分に入るものが中国では江南であり、

南では東南アジアでは大陸部ということになるのだろう。斯波さんの議論の中で、宋代以降の中国の第二次拡張のような話があったが、その主舞台はここになったのだろう。
こういう視点からすると、最後に宮島さんが言われた南の中国の見方というのは非常に面白かった。

そこは朝鮮や日本よりも構造がルーズであり、より東南アジアに近いと言われた。なぜなら、ここでは中国はまだ拡散中でハードな制度が作り出されるほどに飽和していないからだと言われた。この話を東南アジア大陸部と重ね合わせて聞いていて大変勉強になった。

この他にもいろいろなことが話題になった。だが、地理学的な面だけを地図的にまとめ上げると、今私が述べた様なことになるのではないかと思っている。この上に宗教の問題やネットワークの問題が議論された。私個人としては、こと東南アジアに関しては、東南アジア風ネットワークとでもいうものがあって、これがもっと議論されると、東南アジア像はより明瞭化に至るのではないかと考えている。これは極めて難しい問題である。しかし、今回はそうしたことを議論する入り口までに少なくともやって来られたのではないかと考えている。

濱下　こういう機会も、また新しいネットワークである。これからもこのネットワークを組み替えながら、色々な議論を続けていくということでは、また新たな出発点に立ったような気がしている。長い間、ありがとうございました。